

2008. 1. 1  
月刊通信

# はなしがい

第258号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

新しい年を迎えました。今年も、政治、経済、文化など、あらゆる面で厳しい状況が予想されます。そんな中で子どもたちの「学力低下」や「思考力の低下」が気になります。しかし、学力や思考力の根本について、ほとんど論じられていません。それが明確にならないと、今後の見通しは出てきません。そんなことを考えていたら、いい本を見つけました。波多野誼余夫・稲垣加世子著『知力と学力―学校で何を学ぶか』(1987年岩波新書284)です。二十年以上も前の本ですが、学力や思考力についての基本を学校の教育との関係でとらえています。さまざまな国の教育学者や心理学者たちの実験を例にあげて、子どもたちの思考力向上の方法を検討しています。

## ●日常生活での思考力の養成

そもそも、学校に行かなくても人は日常生活からいろいろなことを学んでいます。学校で学んだことよりもずっと多いでしょう。それが生きる力の支えとなっているのです。

「学校以外の生活の場合は、学校のように、人に何

かを「学ばせよう」という意図ははっきりしていない。にもかかわらず、ここで人は生活上有効な技能やかなり高度な概念を学んでいる。」

著者はこんな例をあげています。二歳半の子どもがテーブルの上の二つのミカンを見て「ヒトツ、ミツ」と言い、三つのリンゴを見て「ヒトツ、ミツ、トウ」と数えたとします。そして、母親に「いくつあったの」と聞かれれば「トウ」と答えます。ましがいもあります。この子どもは計数の五つの原理のうち三つを適用しているのだそうです。

第一は、集合の中の各要素にはただ一つのラベル(符号)しか割り当てられないという「一対一の原理」、第二は、計数の際のラベルは同じ順序で配列されねばならないという「順序の原理」、第三に、数え上げて行ったときの最後のラベルがその集合の大きさを表すという「基数の原理」です。ほかに、第四、計数の手続きはどんな集合にも応用できるといふ「抽象性の原理」、第五、集合中のどの要素から数えてもよいという「順序無関連の原理」があるそうです。

つまり、子どもは数を数えるうちに、教わらなく

ても、数学の原理を獲得しているのです。日常生活で私たちは生活上の必要に迫られていろいろな問題を考えて処理しています。たとえば、毎日家族のために料理を作っている主婦は、栄養のあるもの、いかに安く、美味しく家族に食べさせるか、日夜アママを使います。さらに、何か新しいことをやってみようという好奇心が関わることもあります。

子どもたちも、生活の中で活動に参加させることによって、いろいろと考えるようになります。ただし、日常生活での「学習」には限界があります。法的な知識が育たないのです。いわば体験的に学びますから、その知識は家庭内に限定されます。抽象化された理論としての知識になりにくいのです。

ところが、学校では別の知識が身につきます。子どもが持っている生活的な概念を科学的な概念に「引き上げる」ことができるのです。日常生活で身近な人たちとだけ接触していた子どもが、より広い現実の認識へと一歩踏み出すことができます。

#### ●家庭の学び方・学校の学び方

日常生活での「学び」と学校生活での「学び」にはちがいががあります。家庭では母親が、生活の課題を完成させることに重点を置いて教えます。学校では教師が、子どもがひとりですべて課題を解決できるように教えます。家庭では主婦が子どもたちに手伝いをさせたりしますが、食べられない料理を作るわけにはいきません。日常生活においては、普段はうまくいっている手続きをわざわざ修正を加えて、その効果を試してみるようなことはできないのです。

それに対して、学校では「失敗」や「実験」が許されるのです。それが学校のいいところです。学校の目的は、次のように定義されます。

「それ自体有用な特定の技能の習得のためというのではなく、もっと一般的な将来のために学ぶ場をさす。もう少し正確にいうと、将来必要な技能や知識を学ぶうえでの基礎になる諸能力を獲得する」

学校で得られる能力で最も重要なのは、コトバによる概念の形成です。これが思考力の基礎となります。ものごとの関係は目で見ることはできません。

しかし、コトバを使うことによって、ものごとの関連を発見したり、相互関係について厳密にとらえることができます。次の実験は、言語を手段とする思考力を鍛える好例です。

「(丸くて黄色い)目覚まし時計、オレンジ、バナナ」の三枚の絵をセットにして子どもに見せます。そして、同類の二枚を選んで、その理由を問うのです。これを学校に通う子どもと学校に通わない子どもとの双方に実験しました。

どちらの子どもも目に見える色の共通性から「目覚まし時計とバナナ」を選び、形から「目覚まし時計とオレンジ」とを選びました。しかし、「オレンジとバナナ」を選んだときに、学校に通わない子どもは機能的な共通性である「食べる」を理由として言えませんでしたが、学校に通う子どもは、目に見えない関係を理由として答えられました。

何によってこのような成長があるのでしょうか。心理学者のブルーナーは学校教育の本質的な利点を「書きことば」の使用に求めています。

「学校においては、日常生活とはちがって、文章

を書いたり、書かれた文章を読んだりする経験が豊富に与えられる。ここでは、日常的文脈から離れて眼前に存在しない事柄に関する情報を処理しなければならぬ。このような経験によって、(中略)現在の具体的経験から離れて、与えられた言語的前提のみに従って考えることができたり、その場に与えられていない手がかりや「構造」を見つけたし、それを使って考えることができるようになるのであるまいか。」

思考力や想像力の基礎となるのは何でしょうか。人間は眼前の現象を直接には考えることができます。それを何らかの形に変えてとらえます。目に見える現象は写真や絵として写し取ることはできません。しかし、目に見えないものは写せません。それができるのが、言語コトバです。

コトバはどんな人でも使いやすい記号です。目に見える現象はもちろん、目に見えない現実をもとらえられます。わたしたちは常にコトバの助けを借りて、ものごとを見たり、聞いたり、考えたりしているのです。コトバこそ思考力の基礎なのです。

2008. 2. 1  
月刊通信

# はなしがい

第259号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

先日、NHKテレビの特集番組で、フィンランドの教育が取り上げられていました。子どもの思考力をどう育てるのかというテーマです。教師が子どもたちを連れて森へ出かけて行く野外観察の授業がありました。子どもたちはノートを手にして、観察した事実を書き留めていました。これはすばらしいと思っただけではありません。子どもたちは、「○○が○○になっている」と、はっきりと文のかたちで語りながら、記録しているのです。これなら、深い観察ができるだろうと思いました。

ノートの取り方には二とおりあります。一つは、単語によるメモ、もう一つは短文によるメモです。

一般的には単語でメモをしますが、わたしは文によるメモの教育が重要だと思います。考えの基本となるのは文だからです。小さな子どもが「カラス、カラス！」と母に話しかけて意思が通じたとしても、それは考えとはいえません。「カラス」という主語に「が」をつけて、「鳴いた」と述語をつないだとき、「カラスが鳴いた」という考えになります。

このような短い文で、見たことや考えたことを文

にするのが短文のメモです。短い文のかたちで書き留めておくのです。みなさんも経験があるかもしれませんが、考えを単語で書いておいても意外に役に立ちません。思い浮かんだアイデアは、単語だけでは残せません。考えた内容は消えてしまいます。ですから、多少の手間はかかりますが、考えを文のかたちでメモしておくことがよいのです。

## ●考える力と書くこと

フィンランドの学校では、コトバと結びつけた観察が行われていました。ところが、日本の教育ではコトバについてあまり意識的ではありません。テレビでは『ようこそ先輩』という体験教育の番組が今でも放送され続けています。わたしにはいつも気になることがあります。体験が単なる体験として行われるだけで、考えにまで高まっていけないことです。

体験はコトバで表現されることによって経験となります。体験したことを人に話したり、文章に書いたりすることで意味がはっきりします。正確に考えて、考えを深めるためには、書くことがとくに重要

です。「書くことは考えることだ」とか、「考えるためには書いてみるとよい」と言われます。文章は、考えた結果のまとめではありません。書く行為と考える行為とは一体なのです。書くことには重要な意味があるのですが、その意味を深く追求した本はそう多くはありません。

### ●「精神の運動」としての散文

二十年ほど前、わたしは小説の文体について考えていました。そのとき、声に表現することを理論化するために参考にした本があります。それがつい最近、新訳で出版されました。アラン『芸術の体系』（長谷川宏訳・光文社文庫）です。早速、買いました。

この本の最終、第十章で「散文」が取りあげられています。アランは、詩や雄弁と対比される「散文」のはたらきを「精神の運動」であるといいます。それが第一節「散文に固有の方法について」で語られています。ポイントを紹介します。（傍点は引用者）

最初、「散文」の性質がこう書かれます。

「最も目に立つ特徴は、対象を、それとはまったく

似ていない形によって表現することにある。」

——文章は、考えの記録であるとか、考えの結果をまとめものだといわれます。それはまちがいです。見聞したことと文章とは、まるで別のかたちのものです。実際に見たものをそのまま示すわけには行きません。風景を写真に撮るのはちがいます。文章の場合、見たものを単語に置き換えねばなりません。「単語の本当の力は、置かれた位置と他の単語とのつながりから生じてくる。が、ここにも技巧が忍び込んでくる。普通の話し方や書き方に逆らって、読者の予想外の場所に一つの単語を置けば、それが強調の技法となるのは明らかだ。」

——おもしろい言葉です。書くべき対象が同じであれば、みんな同じような文章を書くと思われがちです。同じ出来事なら、だれが書いても同じ内容であり、同じ意味だと思ふのかもしれませんが。

しかし、アランは文章の個性的な表現を問題にしています。文中の語句の位置を変えるだけで、文全体の意味が変わるのです。これは微妙な問題ですが、文章の推敲においては常に問題になることです。

「普通の単語と常用の構文こそが散文芸術の素材であり、目的は、つねに、単語のつらなりによって、思考と呼ばれるものを形成することにある。ここに思考というのは、原因と結果、手段と目的、実体と偶有性、といった、論理学が普遍文法に沿って体系的に提示する、抽象的・説明的な関係のことだ。」

——アランは散文芸術について語っていますが、文章の基本にも通じます。「単語のつらなりによって、思考と呼ばれるものを形成すること」、これが文章の根本です。それは論理によって実現されます。論理学というのたいいてい、簡単な単語や数式で解説されていますが、厳密な思考は文章のかたちで表現されます。ただ単に文の要素を並べるわけではありません。約束があります。文法と論理です。

論理の運びを助けるのは接続語です。「原因と結果」には「なぜなら、つまり、だから」など、「手段と目的」には「……ので、……（だ）から、……（する）ために」などの接続語を使います。

「散文が目的に到達するのは、その目的が単なる再構成であれ、或いは、強力なイメージを喚起し維持

することによって感動と喜びをもたらすことであれば、常に思考のつながりによってなのだ。」

アランは文章を書くことをこう結論づけます。「散文固有の方法とは、まさしく、一般に分析の名で呼ばれるもののことだ。」

文章を書くことは、一文一文を書きつきながら考えを進めてゆくことです。文による現実の分析です。近ごろはインターネットが盛んで、情報と知識さえあれば考えが生まれるかのような錯覚があります。しかし、情報や知識は思考を組み立てる材料にすぎません。考えのかたちに組み立てられねばなりません。「文」つまり「構文」としての組み立てです。

学校教育で考える力を育てるためには、まず、文で語らせ、文で書かせることです。文のかたちは、主部（ヒト・もの・こと）と述部（ドウスル・ドウダ・ナニダ）との「が」による結合です。文は、何らかの事態についての判断です。文のかたちで判断することによって、人々の行動は自覚的になります。文による判断が行動につながります。だから、考える力の教育が生きる力の教育ともなるのです。

2008. 3. 1  
月刊通信

# はなしがい

第260号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

今、インターネットのホームページのデザインに凝っています。みなさんも一度くらいはホームページをご覧になったことがあるかと思いますが、どのページもまるでグラフィック雑誌のページのような色がついてきれいにデザインされています。一体どんなふうで作っているか、原理は実に簡単なものです。

もともとなるのは文字です。文字の大きさを変えたり、色を付けたりするには、 $\wedge$   $\vee$  で括った文字記号を使います。これを「タグ(名札)」と言います。変えたい文字をタグとタグとで囲みます。タグの中の文字は英語の省略語を使います。一般の文字と同様にパソコンで入力できます。

これはある種のプログラムです。タグを解釈してページに表すためのソフトがあります。その代表がインターネット、エクスペローラです。これでページを見ると、**「表示」**から**「ソース」**という操作をすると、文字とタグとの入り交じった**「楽屋裏」**を見ることが出来ます。

この方式はHTMLとよばれます。H(ハイパー)、T(テキスト)、M(マークアップ)、L(ランゲージ)

シ)です。「文章を書いたページをつないで示す言語」という意味です。最近、これに加えて、「スタイルシート」という細かい表現方法があります。

## ● コンピュータによる論理教育

HTMLにはゲームかパズルのようなおもしろさがあります。一種の言語ですから厳密なルールがあります。自分の書いた記号が正しければ、思い通りの画面が表示されます。まちがえれば、おかしな画面になります。書いたページはいつでも表示して確かめられますから、タグを付けたり、外したり、書き換えたりしながらページが仕上げられます。

以前に、わたしは写真植字の指示をワープロでする技術を学んだことがあります。原理は同じでした。そのときは、ワープロでプログラムを書いて、実際に出力機にかけなければなりませんでした。本一冊の出力には十数万円単位のお金がかかりましたから、まちは致命的でした。しかし、今ではパソコンで、こんなに手軽にできるのです。

しかも、初歩から上級まで、その技術の向上には

限らないものがあります。はじめは、画面上に四角い箱を作って文字を入れたり、箱をいくつか並べたりします。箱の背景の色や文字を変化させることも簡単にできます。一つのタグを書き換えるだけで、一瞬にして図形の大きさや色や文字が変わるのです。高度な段階になると、グラフィア雑誌のような複雑なデザインのページも作れます。どんな図形や写真で、どのように組み立てるかを考えてデザインします。しかも、作りあげたページの印刷もできるので、すから、まさにHTMLは新しいデザインの技術といえるのです。

わたしは、この技術が子どもたちの論理教育に使えないかと考えています。一般にコンピュータ教育というと、ソフトの使い方、教育が多いようです。コンピュータを使った思考力の教育のためにはHTMLが生かせるだろうと思うのです。

わたしは、中学生のとき、数学の証明の問題が好きでした。いくつかの前提を基本として、そこから結論を導くものです。HTMLでは、自らの言語表現がどんな結果をもたらすのか、画面で確かめなが

ら操作できます。コンピュータの原理であるプログラムによる創造を、子どもたちも楽しめると思いますが、単純なところから始めて、しだいに複雑にしてゆけば、高度なところまですすめるはずですよ。

#### ●「文章トレーニング」のハンドブック

この間、ホームページ作成の書物を読んでいろいろに、「文章トレーニング」の本を思いつきました。「文書トレーニング」とは、接続語を利用して文章を組み立てる訓練です。文と文との間に接続語を入れて「型」を作ります。それによってまとまった文章がだれにでも書けるのです。

文章というただ長いもののように感じます。しかし、論理のつながりを区切ってみれば、せいぜい五つか六つのつながりです。もっと単純化したら、二つか三つの組み合わせに解消されてしまいます。それを単位に組み立てれば、いくらでも長い型ができます。そこで問題はこれらの型をどのようにまとめたなら、文章トレーニングの実践や教育がやりやすくなるかということでした。

アソク著『ホームページ辞典・第四版』（2008翔泳社）に書かれているタグの分類と表示の仕方が、そのヒントです。それぞれのタグについて、いくつかの項目が書かれています。――①目的（このようにしたい）、②タグの書き方（記号そのもの）、③解説（こういう風になる）、④実例（タグのつけ方の実際）、⑤表示画面、⑥注意点。

これにならって文章トレーニングの本のアイデアと項目が同時に浮かびました。――①定義（接続語のはたらき）、②目的（何のために使うのか）、③形式（接続語そのもの）、④例文（使い方例）

はじめは例文を並べた文集のようなものを考えていました。『歳時記』のイメージです。実際にまとめて読んでみると予想以上におもしろいのです。型で書いたとは思えません。型を超えて書き手の個性も表現されています。俳句か短歌のような味わいがあります。実感のこもった生活の一コマが浮かびます。現代人の生活記録としても興味深いものでした。あとから、二つの項目を追加することにしました。一つは作家の文章から型を取り出した例文です。ま

ず思いついたのが夏目漱石です。加賀野井秀一『日本語は進化する―情意表現から論理表現へ』（2002 NHKブックス）では、漱石が日本で初めて現代文の論理展開を作り出したと言われます。「吾輩は猫である」の中には見事な論理展開がたくさん出てきますし、「論理学」ということばも登場します。

もう一つは、例文についての添削とコメントです。よい文章は整然としているので、論理のすばらしさを見逃しがちです。文章から直接に内容が入ってきます。ところが、まずい文章はゴツゴツして論理のゆがみも気になります。そこを添削と解説で明確にしようと思ったのです。

いわば、文章を書くための実践的なマニュアルのような本を作ろうと思うのです。この本の使い方は自由です。いろいろ考えられます。ひとりでゲームを楽しむように、型にならった文章を書くのもよいでしょう。学校の先生が文章の課題とするのもよいでしょう。暇なときにばらりと開いて読んでもおもしろいでしょう。もしかして出版ということになればうれしいことです。

2008. 4. 1  
月刊通信

# はなしがい

第261号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

人間の本质についての定義はいろいろあります。その一つに、人間は道具を作る動物だというのがあります。また、労働が人間の本质であるとも言われます。労働とは、モノを作ること、人が生きるのに必要なモノを生み出すことです。必ずしも、自分自身のためとは限りません。ほかの人のために、何かかたちとなるモノを作ることです。

モノを作ることとは考えることです。考えるためには道具が必要です。良い仕事をするためには、いつでも道具をできるように準備をしておく必要があります。コトバもひとつの道具です。日ごろからコトバを磨いていざというときに使えるようにしておきたいものです。

## ●モノを作ることの意味

森博嗣『工作少年の日々』（2008集英社文庫）は、モノを作ることの意味を考えさせてくれる本です。著者は、もともと建築を学んだ人で、今はミステリー小説を書いている売れっ子の作家です。わたしはミステリー小説には興味がありませんが、「工作」と

いう言葉にひかれてこの本を手に取りました。著者はモノを作ることに関心を持ち、心から楽しんでいきます。仕事と道具について、こんなことを書いています。

「道具が悪いと、本当に良い仕事は望めない。もし、あなたが何かをうまくできないとしたら、それはまちがいに道具が悪いと疑っても良いだろう。ただし、その場合、あなた自身が道具であることに注意しなければならぬが。」

わたしもモノを作ることが好きでした。小学生のときにはゴム動力の模型飛行機をたくさん作りました。竹ヒゴと紙とでできたプロペラ機です。上手に作ると、ゆっくり大きく旋回して、数分間の飛行が可能でした。中学生のときには、エンジン付きのUコン飛行機も作りました。二本のワイヤーで機体を操縦して回転させる飛行機です。また、真空管式のラジオも組み立てました。さらに、それをオーディオアンプに加工してエレキギターをつないで鳴らしました。そして、高校時代には、アマチュア無線の免許をとって、送受信機の組み立てもしました。

今から思うと、これらの工作にずいぶん時間を費やしました。しかし、モノを作ること、そして、そのモノが実際に動くようになることは楽しいことでした。それは単なるモノではなく、命が通って生きているような気がするのです。

#### ● 生きることと作ること

今の日本社会は資本主義経済の社会です。モノを生産することとモノを消費することで成り立っています。エーリッヒ・フロムは、人間の心理傾向を、生への志向と死への志向との対立でとらえました。何かを生み出そうとする人々には生き生きとした感じがありますが、消費することに夢中人たちには不安な影を感じます。ここには生産者と消費者との対立があります。

近ごろ、消費者の立場が高く持ち上げられていますが、そこには資本主義社会のあがきのようなものも感じられます。ただ消費するためにモノが売られています。食べ物でさえ、買ってきたものに手を加えるようなことが減っています。自ら生み出す機会

はますます少なくなっています。

しかし、そもそも人間は、あらゆるモノに対して、「どのように関わろうか?」という気持ちで向かうものです。たとえば、だれかと対話するときには、自然に相手の話しぶりに合わせて声を発しています。また、手紙に返事を書くときにも、相手の字体に合わせて文字を書いてしまうのです。

また、人間はただモノを作り出すだけではなく、モノを作ること自体を楽しめるものです。今、教育において「生きる力」がスローガンとなっています。わたしは、その根本はモノを作り出す楽しさを教えることにあると思います。

ある作家が「新しい万年筆を買った、一つ作品を書きたくなる」と書いたのを読んだ覚えがあります。そうして生み出されたモノが、その人間の「生きる力」の証明にもなるのです。著者は言います。

「技術の説得力とは、いつも作られた実物にある。スポーツも芸術も、もちろん小説も、それはまったく同じだろう。」

#### ● 人生の設計図と道具

働くことと生活を楽しむことに関する著者の考えもなるほどと思います。職業としてお金の入る仕事と、自らが楽しむこととは別物だと言います。一般にはお金になる仕事の方が社会的な貢献度は高いものです。ならば、お金の入る職業で生活の余裕を作り、自らが楽しめる生活をすればよいと言っているのです。著者の場合は、鉄道の模型作りが趣味です。この本に書かれているのは、小説を書いたり大学の仕事をしながら鉄道の模型を楽しんでいるようです。いかにも楽しそうなので、読者もつい引き込まれて読んでしまいます。

ところが、そこにときどき書かれる教育論や人生論や芸術論もおもしろいのです。とくに感心したのは設計図のある仕事とそうでない仕事との比較です。建築などの仕事は次のように進められます。

「工作に喩えると、作り始めるまえに設計図をしつかりと描いて、それに従って、その寸法の通りに材料を加工し、図面のとおり組み立てていく、というのがプロット先行型の創作手法だろうか。」

それに対して、小説の仕事は次のようになります。

「そもそも行き当たりばったりの作業、出来上がったいくうちに、発見があり、自分自身にも変化があり、そこで何かが生まれる。それを掴み取るために作るのだ。その何かを掴み取ることが主目的であって、作られるものは、製品ではない」

それは著者の建築の設計の方法についても言えることです。つまり、人に何かを指図したり、共同でモノを作る場合には設計図が要るのですが、個人的で創造的な仕事には設計図が不要だと言っているのです。

人生には設計図が最初からあるわけではありません。それぞれの人々が、それぞれの局面において、どのような判断を下し、さらにどのような方向へ進んでゆくかを決定できる能力が必要です。

「生きる力」などという決まったかたちのものがあるわけではありません。一人ひとりの人間にとって方法はまちまちです。どんなすぐれた教育者でも、当人に代わって人生を生きられるわけはありません。教育にできることは、まさにモノを作るための道具を調えさせることでしょう。

2008. 5. 1  
月刊通信

# はなしがい

第262号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

「幸福」は人生における永遠のテーマです。今、ヒルティ『幸福論』（初版1939岩波文庫）を読んでいます。五十代半ばを過ぎて、わたしも幸福について考えるようになりました。一九八一年に読みかけたのですが、三分の一ほど拾い読みをして中断したままでした。それでも本棚に並べていたのは、またいつか読もうという気があったのでしょうか。今回、おもしろいと思ったのは「エピクテトス」の章です。

## ●哲学者エピクテトス

エピクテトスは紀元前一世紀にギリシャに生まれストア主義の哲学者です。ストアック（禁欲的）ということばはここから出ています。哲学者であると同時に奴隷でした。虐待を受けた結果、片足が不自由でした。極貧の生活を続け、物的財産といったら、一つの腰掛けと一つの枕と一つのランプでした。ヒルティは一八三三年にスイスに生まれました。

職業は弁護士でしたが、のちに代議士となり、自由主義者、民主主義者として、婦人参政権運動、禁止運動平和運動などに尽力しました。そして、なによ

りも数多くの著作を残しました。「エピクテトス」はその発言を弟子がまとめたものをヒルティが翻訳して紹介するものです。

ヒルティははじめに、エピクテトスの語録の教育的な効果を述べています。現代の教育においては、「自主独立の人格のはなはだしい欠乏」が見られる。だから、人間教育的な授業法が求められている。その目的は「充分に個性の発達した、生き生きとした人格」を育てるものだといっています。

「人格は、自己教育と模範とによって養われるのであって、自ら獲得するべきもので、教え伝えるものではない。そして、この自己教育を達成することのできるただ二つの方法は、ストア主義とキリスト教とである。」

エピクテトスの言葉から学ぶべきことは、人として自立するための道徳、人として生きる能力です。

## ●幸福の前提条件

「エピクテトス」は五十二の短文から成っています。第一項目では「われわれの力の及ぶものと及ば

ないもの」とを分けています。わたしたちはすべて  
の物事に幸福を求めるわけではありません。この世  
では、あらゆることがある限定のもとで成り立ちま  
す。(以下( )内は項目番号)

「われわれの力の及ぶものは、判断、努力、欲望  
嫌悪など、ひと言でいえば、われわれの意志の所産  
の一切である。われわれの力の及ばないものは、わ  
れわれの肉体、財産、名誉、官職など、われわれの  
所為でない一切のものである。われわれの力の及ぶ  
ものは、その性質上、自由であり、禁止されること  
もなく、妨害されることもない。が、われわれの力  
の及ばないものは、無力で、隷属的で、妨害されや  
すく、他人の中にあるものである。」(一)

これは私たちの行動や生き方の指針です。日々、  
心に置くべきことと、そうしなくていいこととの区  
別です。中国のことわざで言うなら「杞憂」です。  
空がいつ頭の上に落ちて来るか気にかけてなくてい  
いのです。肉体の病気や、財産や名誉や官職などは、  
いわば偶然にやってきました。自らの直接の力によっ  
て生じるものではありません。相手あってのことです。

す。しかし、自己を伸ばし成長させることは、自ら  
の「意志の所産」です。

ストア主義の哲学は、心の安らぎの哲学です。現  
代のようにひとりの人間がどんなに努力しても、時  
代や社会が変わりそうもないとき、心の使いように  
よっては自滅しかねません。自殺者が年に三万人と  
いう時代に、一人ひとりの人びとが心安らかに生き  
抜くことは、ひとつの社会貢献です。

「人を不安にするものは、事柄そのものではなく、  
むしろ、それに関する人の考えである。」(五)

「自分は病気だろうか」という悩みは、事柄その  
ものである病気を見つければ解決するわけです。

「自分の不幸のために、他人を責めるのは無教養  
者の仕方であり、自分を責めるのは初学者の仕方だ  
あり、自分をも他人をも責めないのが、教養者の、  
完全に教育された者の仕方である」(五)

わたしは生徒たちによく言います。「オトナとは  
他人を責めずに、自分で責任を取れる者のことだ」  
と。ただし、現代の社会にも、責任を取ることから  
逃げていくオトナはいくらもいます。

「きみは、ある戯曲において、作者がきみを通じ  
て演出しようとする一定の役割の担い手であること  
を忘れるな。(中略)きみにあてがわれた役割を立  
派に演ずることは、きみの仕事であり、それを選ぶ  
のは他人の仕事だからである。」(十七)

シェイクスピアは、世界を劇場と見なしました。  
また、人間は社会的なさまざまな関係の総合された  
ものであるという言い方もされます。KY(空気が  
読めない)という流行語もありますが、人はもっと  
広く大きな社会的関係の中に生きています。い  
いえ、人は人として生かされているのです。

「義務はすべて人と人との関係によって決まるも  
のである。」「他人と仲良く暮らすことのできる者  
はただ、他人に対してまったく無関心になり得た人  
か、あるいはまた、福音書の言い方に従えば、七度  
の七十倍ほど他人をゆるそうと固く決心した人かで  
ある。」(三十)

エピクテトスは単に、外的な条件に身を任せよと  
語るではありません。積極的な行動が必要です。

「きみがもし、それをしなければならぬという確

固たる信念を持ってある事をなすとき、たとえ多数  
者(大衆)はそれについて違って考えようとも、公  
然とそれをするにはばかることはない」(三十五)

最終項目では生きるための指針を示しています。

「哲学の第一の、最も重要な部分は、処世の規則  
を含む部分である。たとえば、「嘘をついてはなら  
ぬ」というようなものである。第二の部分は、この  
規則の証明の部分であって、「なぜ嘘をついてはな  
らぬか」というようなものである。第三の部分は、  
前の二つの部分を確認し、説明する部分で、(中略)  
最も大切な、全体の要となるのは、もちろん第一の  
部分である。ところが、われわれはこれを転倒して  
いる。われわれは普通、第三の部分に停滞して、一  
切の努力をここに集め、第一の部分はまったくお  
ざりにされている。」(五十二)

さて、次の言葉がエピクテトスの哲学の本質です。

「よるこんで必然に従うもの、／彼こそは賢者に  
して、神を知る人である。」(五十二)

わたしの師・大久保忠利は繰り返し繰り返し語り  
ました。「実行が実力を生む！」と。

2008. 6. 1  
月刊通信

# はなしがい

第263号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

ある大学で文章の書き方を教えて三年目になりま  
す。大学生のほとんどが小中高で、文章についてまっ  
たく学んできていません。そもそも、人間はコトバ  
を使って考えるのだということを知りません。また、  
考えたことを文章に書くのではなく、文章を書いて  
ものごとを考えるのだということとても驚きます。  
わたしは、文章を手段とするものの考えかたを学  
生たちの言語能力として鍛えたいと考えています。  
文章はコトバを使った思考です。しかし、思考はコ  
トバだけではたらくのではありません。現実のもの  
ごととの関連で考えを生み出すのです。

## ●アラン『芸術の体系』

散文としての文章をもっともすぐれた思考手段だ  
と考える哲学者がいます。フランスの思想家アラン  
です。わたしは今アラン（長谷川宏訳）『芸術の体  
系』（2008光文社古典新訳文庫）を読んでいます。  
密度のある文体で理解するのがむずかしい本ですが、  
新たに翻訳されてとても読みやすくなりました。  
中心テーマは人間の想像力です。芸術作品を人間

の想像力と表現活動の成果として、各芸術の特徴を  
解明しています。ダンス、装飾、詩、音楽、演劇、  
建築、彫刻、絵画、散文、という分野が取りあげら  
れます。「散文」としての文章は最後です。  
芸術の諸ジャンルは、いわば日常のさまざまな思  
考法の結晶です。わたしたちの発想や思考の典型と  
いえます。芸術はわたしたちの生活を豊かにしてい  
るのです。そのなかでも文章は、人間にとってもっ  
とも強力な思考手段なのです。

## ●芸術と文章

アランのことばを前書きの中から紹介しましょう。  
「要約は、百害あって一利なしだ。」——アラン  
ははっきりと要約を否定します。文章を読むことは、  
文章のすべてを読むことです。単に情報を伝えるな  
らば要約もよいでしょう。しかし、作品としての文  
章にとっては意味がありません。学校の試験で「何  
文字以内で要約をきなさい」という問題は定番でし  
たが、深い思索のためには意味がありません。  
「想像力の働きがわたしたちの体の機構と反応に

よって大きく左右される。」——デカルトからの引用です。アランは人間のからだと思想の関係を重視しています。ヒトはアタマだけで考えるのではなく、並行してカラダを使うのです。たとえば、芸術としてのダンスももの考えかたのひとつです。カラダを手段として想像することもあるのです。

「人は証明したいとなったら、なんでも証明してしまう。が、本当にむずかしいのは、なにが証明したいかを知ることだ。」——今、価値の相対化がすすんでいます。ものごとの良否や良し悪しについて判断を保留する傾向があります。しかし、アランは自身の「趣味の判断」に自信を持っています。「なんど出会っても心から賞讃できるもの」と「人はほめるが自分ではとても賞讃する気になれないもの」との区別です。芸術の評価の基礎はいわば感覚的なものですが、カラダによる感覚にとどまらず、直観へと通じているのです。

「見たとたんに確実に美しいと判断でき、その判断が撤回されることのないのが美だ。」——アランの「美」の定義です。アランの哲学的な思考は現実

のものと、とくに芸術作品への直観的な思いを基礎としています。フランス語ではボンサンヌ（良識）と表現されます。

「精神はものを基準にしてすべての思考を真に体系的に展開し、その正しさを確信する。だからこそ、作品を目の前にしていると安らぎと確信が得られるので、この本は作品を前にして得られた安らぎと確信を、あえて必要なものだけに限定して記述したものだ。」——芸術としての「もの」から得られる「安らぎ」と「確信」、それが哲学の基礎なのです。

#### ●若者の言語能力

わたしは三十年以上、若い人たちにコトバや文章について教えてきました。年を追うごとに若い人たちがおとなしくなっています。現代の厳しい状況のなかでは、そうならざるを得ないかも知れません。しかし、わたしはコトバの力を信じたいのです。

人間にとってコトバとはもともと何のためであったのでしょうか。アランは次のように言います。

「説得術が、人類最古の技術の一つである」

わたしはコトバの指導を通じて若い人たちに澁刺

とした精神を持ってもらいたいと願っています。アランは直観力を若さの証明と考えます。

「若々しい精神の思考には論証も証明もない。若々しい精神と他の精神とのちがいは弁論形式の有無にしかない。」

では、芸術として表現された思考は最終的にどのようなかたちをとるのでしょうか。人と人が共有するのは現実的な社会のできごとです。そこに人と人との関わりがあります。

「人に共有されない思考は、どんな意味でも思考たりえない。」

教育において枕詞のようにコミュニケーションといわれます。しかし、それは単なるコトバの伝達ではありません。コトバの共有を目的とするなら、どうなるでしょうか。思考の共有の手段はコトバにはかぎられません。

「古代人が、ことばを使う代わりに、ダンスや身ぶりや音楽を用いたことがなよりの証拠で、そこではあきらかに表現と同意が一体となっている。」

肉体の表現は文章の表現にも影響を及ぼします。

「書きことばにとって、神殿、彫刻、デッサンこそが手本なのだ。」

文章は単に文字の並びのように見えますが、建築物のような立体的な構造を持っているといふのです。

文章がそのように読めるということは、まさに肉体的感覚と一体になった感じ方です。そして、アランの文章の理想は次のことばとなります。この表現自体が文章の美しさの可能性を表現しています。

「分節のある言語を磨き上げて、普遍的で、技術的な作品たりうるところにまでもっていかねばならない。」「本当の散文の輝くような美しさは、証明ぬきの真理を示している。」

最後にアランは前書きをこうまとめます。

「もし隠れた天分が読者を突き動かすようなら、みずからペンか絵筆を手に取りられるがよい。が、天分がおしゃべりにむかうようなら、どうぞ読んでください。」

わたしはおしゃべりをしすぎたようです。みなさんも、この本を手にとってみませんか。

2008. 7. 1  
月刊通信

# はなしがい

第264号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

最近の暴力事件や殺傷事件には発作的な犯行が目立ちます。「キレる」という新語が流行したのはずいぶん前ですが、今では多くの事件に当てはまりそうです。そして、事件のたびに、「どんな思いからこんな事件を起こしたのか」と問われます。また、「まともな想像力があるならば、そんな事件を起こさなかつただろう」といった意見も聞かれます。

わたしの師である言語学者・大久保忠利は、人間の行動におけるコトバの力を重視しました。コトバは単なる情報の通達手段ではありません。意識と結びついて、感覚、知覚、感情、意志などを調整するはたらきがあります。人はコトバで自己の行動をコントロールできるのです。

前回、紹介したアラン（長谷川宏訳）『芸術の体系』（2008光文社文庫）でも、想像力と人間の行動について論じられています。（以下、引用文は分かりやすく書き換えることもあります）

## ●想像力と思考

アランは想像力がよいものだと考えていません。

「体の混乱と同時に精神のうちに入りこんで来るまじがいと無秩序」だと言います。人の体の状態が想像を生むのです。興奮して、顔の表情や身ぶりや体の動きを変化させるとき、「そこにあるとされるものが恐怖の感情を作り出す」のです。

つまり、想像力の原因は不安や恐怖だということです。それは「思いこみ」とさえ言われます。

「体のメカニズムが力を発揮し、強い情動が、体の動きとしっかり結びついて感受される。同時に、将来に関する思いこみが、本当らしいものとして生み出される」

想像力とは「調子はずれの狂ったもの」であり、「体の混乱と精神の交流とが互いに相手を太らせる」のです。放って置いたら暴走してしまうのですが、これを脱する道があります。それは、想像力の「対象」となるものを発見することです。「対象」とは思考のための「手がかり」です。

しかし、対象は客観的にあるものではありません。人によって「設定され、想定され、思考される」ものです。例えば、わたしたちの見る太陽や月も、現

実そのものの太陽と月ではありません。  
「印象に判断が結びつき、判断が印象に明確な形を与えるのだ。」

「対象」は、イメージと呼ばれる「像」に似ていません。「像もまた、与えられるのではなく、印象に基づいて想定され、思考される」ものです。しかし、そのイメージが真実であるかどうかは、厳密に検討されることはありません。

想像も一種の知覚です。わたしたちは想像を通じてものごとを知るのですが、必ずしも現実と一致するわけではありません。アランは想像力のことを、「誤った知覚」とも呼んで、警戒しています。

「知覚」とは、「体の条件や状態に由来するものをできるだけ排除するような検討作用によって、対象の真実を追求しようとするもの」です。それに対して、「想像力」とは、「印象と情動の混合体に信を置き、外界に対する人体の反応に従って対象の存在や性質を判断するもの」です。

つまり、想像力は「場に支配され、激しやすくて不安定であり、動きは豊富だが対象は貧弱であり、

常に曖昧なものである。」

それでは、人が体の条件や情動の支配から逃れて、安定した思考へと進むためには、どうしたらいいのでしょうか。

#### ●生活の芸術化

アランは、体が反応した最初の状態を「生理的錯乱」とよびます。そこに想像力のはたらく余地があります。ところが、一般には想像力について誤解があります。「ある種の錯乱が芸術への通路となると実感している人が少なくない」のです。

想像力の対極にあるものとして、アランは、詩、雄弁、音楽、ダンスなどのさまざまな芸術分野をあげます。そして、芸術の機能について、それが「どうやって人を喜ばせ解放するか」を語るのです。

錯乱の状態は、「情念」にとらわれた体から生まれます。そして、誤った判断を生み出します。「幻影」さえ生みだすのです。「さまざまな影が微笑んだり、脅したり、悲しげな顔をして駆けつけ、逃げて去り、戻ってくる」のです。

アランは「芸術」とよばれる人間のさまざまな行為を「作品」と呼びます。とはいっても特別なものではありません。「芸術家」の作品を求めるわけでもありません。日常生活から生み出される現実的なもののことです。それが思考のよりどころとなります。観念と現実との結びつきです。

「芸術家は、自分の作り出したものにしたがって——つまり、自分の指先から生まれる対象や、調子の整った歌や、リズムに乗った朗読にしたがって——自分の像を律していく」

アランの「芸術」は、ずいぶん広いのです。——ダンス、装飾、詩、雄弁、音楽、演劇、建築、彫刻、絵画、デッサン、散文。さらに、礼儀作法、それにかかわる仕立屋、宝石商、理髪師の仕事まで、「芸術」に入れていきます。

そして、「職人仕事」をとりあげて芸術の基礎とするのです。「職人となると、作り話に終止符を打つような、輪郭のはっきりした対象を作り出す。」  
「完結した、持続的な作品のすべてには、何かしら美的なものがあり、そんな職人仕事のうちにも芸術

家の喜びがある。「すべての芸術作品は、対象としてそこにあるという顕著な性格をもっている。」

つまり、現実的な「対象」こそ思考にたどりつくための「手がかり」なのです。アランは芸術家の思考方法は次のようなものだと思います。

「単に可能だというにすぎないものを相手に、それが最も美しいかと考えるのは時間の無駄というものだ。可能なものはどれも美しくなく、現実のものだけが美しい。まず作り出し、そのあとで判断せよ。それがすべての芸術を成り立たせる第一条件だ。」

「芸術の始まりには、常に、芸術家が知覚を働かせることのできる何らかの対象、何らかの現実的制約が、きっかけとして存在しなければならぬ。」  
「自分のなしたことをよくよく観察し、それを源とし、基準としてこれからなすことを考える」

アランの考える「芸術」とは、私たちの生活そのものです。いわば生活上の手本となるものです。あえて、生活を「芸術」とよぶところに、アランの理想の高さがあります。それは「生活の芸術化」であり、「人を喜ばせ解放する」ものなのです。

2008. 8. 1  
月刊通信

# はなしがい

第265号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

戦後63年目を迎えました。近ごろ頻発する傷害事件や殺人事件などを見ると、社会の状況も人びとの意識もいぶん変わりました。30年ほど前には社会の状況は見えているつもりでした。「これから日本はこうなるだろう」という見通しがありました。まさかこんなふうに変化するとは思いませんでした。教育状況も社会の変化と無関係ではありませんが、何か根本的なものが失われているのに目が届いていないような歯がゆさを感じます。わたしが感じるのは、社会の原則というものが失われたこと、常識が通用しなくなったということです。

最近テレビでは、「まさかこんなことを?」と思われる警察への一〇番通報や、学校にさまざまな苦情をもちこむ「モンスターペアレント」という現象が紹介されています。それも総体的な社会の変化の一部なのでしょう。社会常識や人間関係については、根本から教育し直す必要を感じます。そんなときには、歴史をふりかえってみることで、今という時代が見えてくるものです。

## ●不可能性の時代とは?

現代を解き明かす手がかりとなる一冊が、大澤真幸『不可能性の時代』(2008岩波新書122)です。戦後の歴史を社会学の観点からとらえた本です。戦後の歴史に残る特徴的な事件や小説や映画などを取りあげて、社会と人間との関わりから分析しています。代表的なのは、1988年に連統射殺事件でのちに死刑となった少年と1997年に「酒鬼薔薇聖人」を名乗って小学生を殺した少年との意識の比較です。ここには時代による大きな意識変化があります。

しかし、時代の全体的な変化が明確に解き明かされているわけではありません。それはむしろ難しい問題です。大澤氏は、さまざまな事件から時代の変化をとらえようと努力しています。それがわたしにとって現代を考えるための手がかりになるのです。

大澤氏は、戦後の時代を「理想の時代1945-1970」と「虚構の時代1970-1995」との二つに分けています。わたしが考えてきた時代区分と重なります。たしかに1970年の大阪万博や1973年の石油ショックを境目とする時代の転換がありました。それから二十

五年たった今、また石油によって日本経済に物価値上げなどの混乱が起こっているのも皮肉です。

そして、大澤氏はその後の時代を「不可能性の時代」と呼んでいます。これまでは、現実が「理想」や「虚構」と対立されたのですが、今は何かを対立させることが不可能な時代だということです。

戦後に始まった「理想の時代」とは、「アメリカ」を理想とした時代でした。大澤氏には戦前からは戦前から引き継がれた意識があるといえます。戦時中の戦意高揚運動は「明るさ」を全面に押し出したものでした。その意識は戦後の民主主義の提唱などにも引き継がれたといえます。

「理想の時代」とは、いわば「アメリカ」の資本主義を発展の象徴とする時代でした。戦後の経済成長は、資本主義国の代表であるアメリカの後追いだったのです。戦争によって、日本の資本主義は一時期足踏みをしましたが、戦後も引きつづき成長しつづけてきました。そして、モノを生産するという意味での成長がピークに達したのが、1973年のオイルショックでした。

### ●「理想」と「虚構」の衰退

「理想の時代」の終わりは、モノを生産するという資本主義経済の発展の終わりでした。社会全体にとって必要なものがほぼ満たされるだけの生産力の段階に達したのです。ただし、すべての個人にとつての必要が満たされたというわけではありません。

そして、「虚構の時代」とは、モノの生産ではなく、「虚構」のモノを生み出す時代ということですが。それは「土地」と「株」に代表されるものでした。のちにインターネットの「情報」が加わります。

テレビやマスコミは「現実」としての社会の実体を見失う方向に進みました。社会のできごとは「虚構」として受け止められます。テレビは娯楽性が重視されるとともにドキュメンタリー番組はますます少なくなりました。テレビドラマの終了後には「この物語はフィクションです」という字幕が出ます。

マスコミには、現実社会についていくつかのタブーがあります。その根本は「資本主義」の自覚です。現代の日本社会が「資本主義」の社会であり、資本

主義の価値観によって支配されているということですが。それは空気のようなもので、わたしたちは自身が「資本主義者」であることを自覚していません。

### ●どうやって「現実」を把握するか？

ところが、ここ十年くらいは「虚構」も危うくなっています。大澤氏は若者たちの間に新たな「現実」への回帰がはじまっているといえます。その根本的な原因は資本主義経済の苦況なのですが、文化現象にも現れています。「虚構」から様ざまな文化が生まれました。たとえば、かつての趣味の代表である「鉄道」は現存する土地へ、「切手蒐集」は現存する異国へと人びとの思いを運ぶものでした。

しかし、モノづくりに支えられた資本主義経済がゆきづまったとき、「虚構」にもとづく文化も成り立たなくなりました。対立するべき「現実」そのものが喪失したからです。そこから、不安や苛立ちが生まれます。それは自らの実感と感覚へ執着することによって、暴力や破壊を伴うものになりがちです。ところで、今、プロレタリア文学である『蟹工船』

が若い人たちに読まれています。これはあらためて「現実」をとらえ直す一つの道かもしれません。蟹を加工する船に乘せられて厳しい労働条件で働く労働者たちの描写や荒れ狂う海の描写などには、「これこそ現実だ」と感じさせる力があります。そんな状況を今の若者たちが実感をもって想像できるかという不安もありますが、すぐれた文学作品の表現には読者を新たな認識に導く力があるのです。

教育の場では、繰り返し「体験学習」が話題になります。しかし、単に「体験」をするだけでは不十分です。自らの行動を振り返って意味づけ、「体験」を「経験」へと転換する作業が必要です。それはコトバという表現手段によって可能になります。

ヒトはコトバによって自らの意志や感情を自覚し、コントロールできます。直感的に行動したり、暴力に訴える人には意識の自覚がありません。意識は言語のかたちをとることで明確になります。コトバの能力とは、自身と「現実」との関係を把握する能力です。わたしはあらためて、現実を認識する手段として、コトバの能力の重要性を感じています。

2008. 9. 1  
月刊通信

# はなしがい

第266号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円 (1年1,500円 千共)

昨年、表現よみ独演会で中島敦『弟子』を取り上げてから、中国の思想家・孔子に関心を持っていきます。孔子といえば『論語』です。最近すばらしい入門書を見つけました。加地伸行『ビギナーズ・クラシック中国の古典 論語』(2007角川ソフィア文庫)です。これまで読んだ中で最も優れた入門書です。まえがきには、中学生、高校生に分かるように、「祖父が孫に語るように、中学生に古典を語りたい」と書かれています。本当にわかりやすく、おもしろい本です。前半は孔子の伝記、後半は『論語』のことの解説です。基礎的な語句の解説から内容の解説までていねいなので漢文の勉強にもなります。

## ●「論語」とは？

孔子は紀元前五〇〇年ごろの人です。春秋時代と呼ばれた時代です。諸国が乱立して勢力を争っていました。そんな時代に各国の王は国力を伸ばすために、相談役としての人材を求めました。孔子もその中のひとりでした。

わたしが孔子の思想に関心を持つのは、現代の日

本と時代の共通性があるからです。今の日本も、国が乱れていわば戦乱の状態です。そこで問われるのが、国をどのように立て直すか、国民をどのようにまとめるか、という問題です。そのためには、民衆ひとりひとりの生き方である道徳も問われます。

これまで、孔子の思想や儒教の思想はもっぱら権力者の立場から民衆支配のために利用されました。権力者の都合のいいように「忠」「孝」などの道徳が民衆に押しつけられたのです。儒教の思想が「古いもの」として反発された理由はそこにあります。

しかし、孔子はただ単に権力者のために思想を語ったわけではありません。民衆にも有効な普遍的な道徳を説きました。本来の道徳は、他人から押しつけられたり、命じられるものではありません。それぞれの人々が、みずからの行動や行為を律するための規範として自分自身に命ずるものです。

そう考えると、孔子のことは、権力者による命令のことばではなくなります。そして、儒教の思想や道徳も、戦乱の時代に民衆が生き抜くために有効なものだと考えられます。

## ●孔子・墨子・孟子

もう一冊おすすめた本があります。金谷治『孟子』（1966岩波新書）です。孟子といえば「孟母三遷」の教えが有名です。孟子の母が子どものために三回、家を移したという話です。はじめ、墓場の近くにいたとき、孟子は死人の埋葬の真似をして遊びました。それで母が居を移したのが市場の近くでした。すると今度は商売のかけ値売りの真似です。それで学校のそばに移転すると、孟子は学生たちの礼儀作法の勉強の真似をして遊んだのでした。

孟子は、孔子の死後、一〇〇年のちの思想家です。わたしはほかに、墨子、老子、荘子などの名を知っています。それぞれの思想の内容については知りませんが、ところが、たまたまこの本を手にして、孟子の思想について知るとともに、孔子に続く思想家の見取り図が見えてきました。

孔子の中心思想は「仁」です。それは「愛情を主とした自然な情感に基づく徳」で、とくに「家族の中の肉親の間の愛情」です。それを孔子は広く社会に普遍化しようと思いました。孟子は孔子の思想を引

き継いだのですが、思想的な対立者がいました。墨子です。この人も孔子の後継者ですが、思想の受け止め方がちがいました。

墨子は孔子の前提とする家族愛に疑問を持ちました。身近なところから出発して愛を拡大せよといっても「結局は我が家第一、縁故者びいきに終わる」と言います。それで「兼愛」という「無差別平等の博愛」をたてました。また、「尚賢」として「血縁にかかわりなく優秀者を尊重せよ」と主張しました。「農民や工人でも、有能でさえあれば官位につけられる」社会を理想として、大国の侵略戦争に反対しました。墨子の「兼愛」は「血縁的な連なりに依存する古い社会をぶち壊して、人類愛にもとづく共通の広い社会を開こうとする革命的な思想」でした。

## ●中国思想と現代日本

それに対して、孟子の主張は消極的です。孔子の「仁」を基本にすえて「仁は人の心なり」「義は人の路なり」と言います。そして、墨子の急激な変革には反対して漸進主義をとります。その一例に「五

倫」があります。人間関係を「父子・君臣・夫婦・

長幼・朋友」の五つに分類してその徳義を述べます。孟子は「性善説」の代表者だとされます。それは一人ひとりの人間について、「伝統的に含まれてきた人々の暖かい心情」を信じる心です。「忍びざるの心」とも言われます。つまり、「他人の不幸をそのまま見過ごすことのできない同情心」なのです。

「孟子」の特徴は、たとえ話やエピソードの具体性にあります。この本でも次々に登場するエピソードには小説の一場面のようなおもしろさがあります。孟子は思想家ではありますが、文学者の資質を兼ねそなえた人物に見えます。孔子の唱えた「仁」をより繊細にしたところが孟子の思想の特徴です。金谷氏が孟子に熱中するのは、そのところからです。

「忍びざるの心」を生かした孟子の「王道政治」の原則は次のようなものです。第一は、経済的な安定です。「恒産なきものは恒心なし」といいます。目指すのは農民の家族生活の安定でした。第二は、精神的な安定、とくに教育です。「人の暮らしというものは、衣食にあきたり安住して、それで教育が

なければ、禽獣に近くなる」

また、孟子は権力者に対しては、民衆と共に生きるべきことを要求しています。「天下の人々とともに楽しみ、天下の人々とともに憂えるようにすれば、きつと王者になれる」

さらに、孟子は民衆による革命も是認して、「天意」とは「民衆の意思」によって代表されるという考えを述べています。次のことは、のちに様ざまな学者からの反発を招いたと言われます。

「民衆が貴い。社稷すなわち国家の象徴としての土地神、穀神がその次ぎで、君主は軽い」

これは権力者が儒教の教えと考えている国家原理を否定するほどの危険を秘めたものでした。日本の国学の祖・本居宣長も強烈に批判したそうです。

さて、わたしの関心は、孔子―墨子―孟子という思想の系列から、現代の日本の社会問題を考えることです。どんな問題に、どんな思想家の、どんな考え方が適用できるのか。孔子の言う「温故知新」です。日本人には親しみ深い中国思想が、現代社会の問題解決のヒントになると考えています。

2008. 10. 1  
月刊通信

# はなしがい

第267号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

竹内敏晴さんは『ことばが劈かれるとき』という本で有名です。1995年10月号「はなしがい通信二二号」で取りあげました。竹内さんは子どものころ難聴で、十七歳ごろまでことばが使えませんでした。のちに演出家として名をなすようになり、ことばの専門家としてたくさんの本を出しています。

その後、竹内さんの本は何冊も読んでいますが、つい最近、朗読の根本を解き明かしたすばらしい本を発見しました。『話すということ（ドラマ）——朗読源論への試み』（1981国土社）です。「朗読源論」ということばにひかれて図書館で借りたのですが、朗読にかぎらず、ことばのからだということばとの関係——人間の教育全般について書かれた名著です。最初の十数ページを読んで、「これはすばらしい」と思って、夢中でメモを取りながら読みました。ところが、図書館の本は背中からパリンと割れてしまいました。バラバラにならないようにそうっと読んでいる内に、手元に一冊欲しくなりました。

インターネットの書店で調べたら新版がありました。十三年後の1994年に国土社の「現代教育一〇一

選」の一冊として刊行されていたのです。ハードカバーの装丁です。これから大切に読み返します。

## ●教育の基礎

タイトルにカッコ書きされた「ドラマ」を生かすとタイトルは「話すというドラマ」になります。内容は朗読ばかりではありません。ことばの教育全般にふれています。文章論もあります。声でよむとイメージのわきやすい文章とそうでないものがわかります。教科書の文章をていねいに読みながら分析しています。こうしたらいい文章になるといふ具体的な指摘もあります。しかし、竹内さんの本領は、からだと声とのかかわりを根本から述べた点です。

まず「朗読」について次のように言います。  
「朗読という名称はいつごろ生まれ、いつごろ教育用語として定着したのかまだ知りませんが、私は好きではありません。しかしほかはまだ呼び名が見つからないので止むをえず用います。」

「表現よみでない読みはあるのだろうか」とも言います。わたしは我が意を得たりという思いです。本

来の朗読とは、文章の字づらをよみ手がただ単に読み上げるものではありません。竹内さんの考える朗読とは次のようなものです。

「文章に書かれていることばは、その心の動き、あるいはイメージを、さぐるための手がかり、であるにすぎない。」「だから「私」は、他人の文章に触れて、それに触発されたことを、ある場合には、それについて、語る——これが朗読と言われる作業ということになります。」「話す、ということは、時間の流れに生きていることです。一刻一刻に過ぎてゆく時間の中で、ことばが生まれ、次々発展し、消えてゆく。そこには現在しかない。」

表現という点、一般にはまったく自分の内部から生み出されるものと思われています。わたしは画家の中川一政を思い出します。晩年には毎日のように「駒ヶ岳」に通って、山と向き合って絵を描きました。ただ山の姿を写していたわけではありません。山から受けた印象や感動を表現していたのです。竹内さんが朗読で問題にするのは文章との関わりです。ここから声による文章批評が生まれます。

同じことなんだよね。」

また、「朗読のアナ」についての指摘は、一般的な朗読への鋭い批評となります。

「それが、いわゆる、朗読ってことをやるときの一番大きなアナの一つだね。自分の方で感情なり意味なりを確立しといて、それを声に出せば、何か成り立っているというふうな感じになる。まだそれこそ混沌とした中からへことばが生まれてくる、その過程こそ大切なのに。」

わたしはインターネットでさまざまな朗読を聴いています。お芝居でもするように読む人や、心と声とがまるで分離したような人は大ぜいいます。

#### ●朗読教育の目的

では、竹内さんは朗読を通じてどのような教育を目指しているのでしょうか。こう言います。

「朗読そのものがうまくなるってことを、私なんかの場合には、あまりもくろんではいない。どうということかという点、子どもが全身で生き生きとして、声も出るし、思考も想像力も活発に働き、とにかく

「朗読ってというのはさ、ことばに一言一言ふれるにつれて、そのイメージがちゃんと自分の中に浮かんできて、その世界の中で生きるといふ作業でしょう。」

ところがこの文章、さっき聞いただけでいねいに読んでるわけじゃないけれど、どうも雑だなあ。絵が書いてあったら、ことばによって生まれてくるイメージをつなげて発展させていく作業が絵によってごまかされるので。ごまかされるってことが分らないからさ、その絵を見て、こういうもんだなあと思いついて読んで読んじゃう。そう大ざっぱに読んじやうたらさ、一つ一つのことばは全然生きてこないからね。」

ただ単に声に出して読めば文章の理解が深まるわけではありません。

「自分の中に動いてくるイメージをことばで書いたとき、そのことばで自分の中のイメージが読む人の中に成り立つか立たないかってことを感じとる能力ってのが、たとえば文章に対する芸術的感受力というふうなもので、詩人とか小説家とかは、その能力が明確でなきゃダメなわけでしょう。読みとる方でも

今、一瞬のゆるみもなく表現が動き出している、今も充実して生きているということがそこで成り立ってばいい。そういうことの一つの側面、あるいは、そういうことを持ちきたすためのきっかけとして、朗読というものが考えられるべきではないかと考えているのです。」

「朗読という行為は、そういうからだ全体の表現行為の一部にすぎない。ですから、朗読とはどういふものかというふうな、一つのジャンルとして位置づけ、その中に閉じ込めて技術的なことを考えるよりは、そういう動き全体の中の一部として常に開かれたものとして考える方がいいと考えるのです。」

近ごろ、教育において、「ことばの力」が重視されています。日常のコミュニケーションでの話し・聞き能力の低さが問題になっているからです。わたしはさらに、読み・書き能力と結びつける必要性を感じています。日常を越えて、視野を広めて、目に見えない世界をとらえる能力を育てるものです。人間のコトバの力は、声のことばと文字のことばとの相互協力によって成り立っているのです。

2008. 11. 1  
月刊通信

# はなしがい

第268号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

わたしは以前から武満徹という作曲家に関心を持っています。ひとつは、大江健三郎、谷川俊太郎、小澤征爾などの人たちとの交流に心をひかれたからです。そして、音楽のことよりも、むしろ文学や映画についての発言を耳にしています。何冊かの本を手にしたこともありましたが。しかし、本は厚くて高価なものが多く、内容もむずかしいものでした。

それで、これまで読みきった本は一冊もありません。武満さんは十二年前に亡くなってしまいました。

ところが、読みやすい文章を取り出してまとめた手ごろな本が出たのです。『武満徹エッセイ選―言葉の海へ』（小沼純一編。ちくま学芸文庫）です。

六冊の単行本から取りだされた六十二編が六つのテーマにまとめられています。

〈音楽、土地と方位〉、〈音楽、個と普遍〉、〈音と言葉と〉、〈日常から〉、〈映画／音楽〉、〈フィクションの〉

わたしはまず「言葉の海へ」というサブタイトルに注目しました。そして、〈音と言葉と〉の章を中心に読みました。その中から注目すべき言葉を引用

しながら、わたしの考えを展開してゆくことにしましょう。

## ●武満徹「音と言葉」

武満さんの作曲は、言葉から始まるのだそうです。「私の場合、ある音楽的発想が、方向性を持った一つの運動として始まるとき、いつでも、言葉が重要なきっかけになります。」

その「言葉」は、何か特定のモノ・コトを意味するものではありません。「指示的な機能としての言葉」ではなく、「多義的なあいまいさを残した、よりの言葉の発生の起源に近い状態」です。心に言葉が浮かんではいても、何かモヤモヤした状態です。

そこで、武満さんは次のようなことをして音楽を考えるのです。

「いつも半年ぐらい、大学ノートに数冊の、ただ言葉を、文脈をなさないある言葉を書いたりします。」

意識の言語化です。「自分の内部に言葉を獲得」することによって、「「他者」への自覚」が生まれると言うのです。自分の内部で言葉となったものだ

けが「他者」に伝わる表現として意味をもつのです。武満さんの語る「言葉」とは、文字のことばではありません。音声のことばです。常に音を伴います。「僕は今まで言葉という単語を使ってきましたが、その「言葉」を「音」と置き換えてくださってもかまわない。」(傍点は原文)

「音」は「おと」と読むはずですが。武満さんは、言葉の「音」と、音楽の「音」とを共通の問題としてとらえます。現代音楽については、「音楽の肉体がない」と嘆きます。そこで、肉体回復のために登場するのが「吃音宣言」です。

武満さんは言論にも「言葉の空虚しさ」を感じています。言葉が「肉体を離れてよそよそしい」。言葉は、肉体からも精神からも離れてはならない。「言葉は生命の証」であると言います。

そこで提案するのが、吃ることです。まず、例にあげるのが、ベートーヴェンの第五の主題、「……ダ・ダ・ダ・ダーン」です。この「……」が重要なのです。最初の「ダ」の音を力強く発するためには、「……」に「んっ」という力が必要です。うしろ腰

に力を入れて沈み込むような発声法をとるのです。これは演歌の歌唱法では「タメ」と言います。

武満さんは、第五の主題は「素晴らしく吃っている」と喜んでいます。そして「どもり」の本質をこう述べるのです。

「それは革命の歌だ。どもりは行動によって充足する。その表現は、たえず全体的になされる。少しも観念に墮するところがない。」

「人間の発音行為が全身によってなされずに、観念の喙によってひよいとなされるようになってからは、音楽も話も、みなつまらぬものになっちゃった。」

武満さんは、芸術は生命とつながるものであることを前提にして詩や音楽を考えます。

「芸術が生命と密接につながるものであるならば、ふと口について出る言葉にならないような言葉、ため息、さげびなどを詩とよび、音楽とよんでもさしつかえないだろう。」

#### ●どもり式の発声法

そこで武満さんが提唱するのが「五十音の発音練

習」です。つぎのように五十音を順に二つずつ重ねてゆく発声練習です。

「ア・ア、イ・イ、ウ・ウ、エ・エ、オ・オ、……」

単純なものですが見てはいけません。どもって発声するには力が必要です。まさに全身的な力です。わたしが表記するなら、つぎようになります。前に述べたうしろ腰の沈み込みを二度ずつ繰り返すのです。

「アッア、イッイ、ウッウ、エッエ、オッオ、……」

武満さんの語る「言葉」とは、いつでも、文字ではなく「発音される言葉」です。

「われわれは発音という行為によって、言葉を獲得し、精神的になるのである。」

いい言葉です。オーラル・インタープリテーションという語があります。日本語では「口頭解釈」と訳されます。文章を声に出して読みあげることによって、意味内容をつかむという方法です。

ただ、文章を黙読するだけでは深い理解は生まれません。ところが、文章を声に発して意味を表現しようとするときには、さまざまな要素を決定しな

ければなりません。どの音にアクセントをつけるか、文をどこで区切るのか、どんなリズムをつけるのか、どの語句を強めるのか。それらのことが、すべての語句について細かく問われるのです。

「どもりは、あたりまえのことすらも、あたりまえには言えない。発声のたびに言葉と格闘しなければならぬからだ。そして、ちゃんな論理というものを壊してしまう。」

武満さんは「どもること」を原初的な発声形態であると考えています。

「どもること、言葉はそれ自体の肉体をもち、どもれば、言葉の表面の意味は解体され、人は、確かな裸形の意味を掴むだろう。脆弱な論理にまどわされず、へ人間物としての言葉は、こうして真に響くのである。」

「人間は語らずにはいない。なぜなら、言葉はその生成において最も根源的であり、発音は生命の初発的な行為だからである。」

さて、みなさんも、どもり式の発声練習で、自身の心からの声を発してみませんか。

2008. 12. 1  
月刊通信

# はなしがい

第269号

よりよい未来の教育のために  
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515  
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp  
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円 千共）

最近、殺人事件があるたびに、人と人との関係、とくに犯人の意識に関心を持っています。犯人の多くは恨みや不満を他人に向けて犯行に及んでいます。かつては、政治や経済など社会的なものに向けられた怒りがありました。今は、それだけ不満や不安が内面化したのでしょうか。しばらく問題となっているイジメは個人の恨みや不満の集団化だといえます。ところが最近、孤立した犯罪が目立ちます。それは、氷山の一角といった現象なのでしょう。

## ●人間の本质と人間関係

また、内田樹たつる氏の本から刺激を受けました。『街場の現代思想』（2008文春文庫）です。テーマはいくつかあります。「文化資本」について、結婚について、大学教育についてなどです。後半には人生相談のかたちをとった連載がまとめられています。そのうちの「想像力と倫理」の章がおもしろいものでした。ここには内田氏の思想の核となる人間観があります。それは次のような質問から始まります。「他人の身になること」と想像力を働かせること

とは、同義なんですか。

内田氏はまず「人の身になって考える」ことへの疑問を述べます。それは「よいこと」なのか、本当に「人の身に」なれるのか。そして、それを口にする人たちの安易さを批判します。

そこで登場するのがニーチェの「奴隷道徳」の考えです。ニーチェは「他人と同じようにふるまい、同じように感じ、同じように思考し、同じように欲望する」のは「畜群」だと言うそうです。だから、「全員が全員の「身になって考えることができる社会とは、言い換えれば、全員がそれぞれの「同類」になっている社会である。」

そこで、ニーチェは、こんな「奴隷道徳」に対して「貴族道徳」を唱えます。それは、「畜群」や「奴隷」を見ると「吐き気がする」という感覚です。ここまでくると、最近の犯罪者に見られるような意識傾向に近づいてきます。

「大衆を嫌う」という感覚が大衆的に共有されている時代。それがニーチェ以後の社会である。「おそらくどんな人にも多かれ少なかれ、このよう

な傾向があるでしょう。「わたしはあんな人たちははちがう」、「おれはほかのやつらとはちがっている」といった自負心も程度が過ぎれば、嫌悪につながります。誇りも憎しみへと変わる危険を持ちます。

### ●人は人とうつきあうか

内田氏は人と向き合うとき自分に課すべき倫理基準を次のように立てます。

「社会の全員が「自分みたいな人間」になっても生きていけるような人間になることです。」

これは他人を許すことの基準を自分自身に置くという複雑な戦略です。「自分」が中心のようですが、結果として、たしかに「他人の身になって」います。武者小路実篤や志賀直哉など、白樺派の文学者たちも、「自己本位」から出発していました。ただし、そこにとどまるものではありません。自分が大切だからこそ、人のことを考えられるというものでした。わたしの専門分野で言うなら、表現よみもそうです。人に聞かせるためによむものではありません。自分がその作品をつかみたい、理解したいという動

機から発するものです。それが結果として人のためになる――人を楽ませることになるのです。

内田氏が「仲間」と呼べるのは、次のような二つのタイプの人だそうです。

「私が自分の「仲間」として許容できるのは、

「ウチダが何を考えているか知らないけれど、まあ、好きにしるよ」と言ってくれる人間、社会にいろいろなトラブルがあるときに、「悪いのは誰だ!」という他罰的な設問形式に固着することなく、「まあ、いろいろ困ったことはあるけど、みんなでちょっとずつトラブルの責任を引き受けましょう」と言ってくれるような人間である。」

この二つの人間タイプは、ひっくりかえせば、内田氏が他人に向ける態度です。つまり、自分の「仲間」として他人に自由を認め、他人を責めずに責任の一端を自らも引き受ける心がけです。これは世間の人たちすべてに対する内田氏の基本的態度です。これをまとめると、あらゆる人たち、とくに「マイノリティ」である「よく分からない人間」に対しても次のような立場を取るのです。

「「それ(引用注Ⅱマイノリティ)を「考慮する」というのは、「共感する」でも「理解する」でもなく、「よく分からない」けれど、「私はあなたの権利を守る」という言葉である。」

### ●結婚と人間関係

内田氏の結婚観も人間関係の基本となるユニークなものです。まず、結婚について書かれた章のタイトルがおもしろいものです。「結婚という終わりなき不快」「他者としての配偶者」といった具合です。

「結婚はいいことか?」という質問に対して、恋愛と結婚とに必要な能力の対比をします。恋愛には「快楽を享受し、快楽を増進させる能力」、結婚には「不快に耐え、不快を減じる能力」が必要だということです。結婚における「不快」とは、「先方の親族」と「子ども」に始まり、配偶者そのものです。

「結婚がオススメなのは、それが「不快」な経験、「受難」の日々を約束してくれるからである。」

結婚生活でお互いが感じる思いはこんなふうです。「この人が何を考えているか、わからないし、こ

の人も私が何を考えているのか、分かっていない。」それが「人間性」を深めてくれるということです。その根拠は人間の性質にあります。内田氏は人間にしかできないことは何かと問いかけます。ふつうは、道具、コトバ、社会的関係などがあがりますが、内田氏は、「墓を作ること」だと指摘します。経験もないのに人間は死んだ状態を「知っている」。だから、死者にさえ思いを致して葬ることをするのだと言います。

「人間というのは「決して気持ちが通い合わない他者(つまり「死者」のこと)の気配や魂魄やメッセージ」「さえ」聴き取り、感じ取ることのできる能力によってサルと分岐した。」

そして、結婚生活についての結論はこうです。

「理解も共感もできなくても、なお人間は他者と共生できるということを教えるための制度なのである。」

人が生きるために「他者との共生」が必要だというのは厳しい真実ですが、それも人間の試練と思えば、あらためて人生に興味がわくことでしょう。